



◎1964年に日田三隈商業高校として開校。1983年に普通科を増設して現校名に改称し、1996年に商業科や家庭科の科目を充実させた総合学科に改編した。教育信条を「自立」「実践」「信頼」とし、高校生の職業観の育成を目指したキャリア教育を推進する。生徒の進路は6割が進学、4割が就職。

設立	1964(昭和39)年
形態	全日制・単位制／総合学科／共学
生徒数	1学年160人
09年度進路実績	4年制大には、京都産業大、近畿大、尾道大、福岡大、久留米大、中村学園大、九州産業大、別府大などに計21人が進学。短大は24人、専門学校には63人が進学。就職は地元を中心に66人。
住所	〒877-0000 大分県日田市大字友田1546-1
電話	0973-23-3130
Web Site	http://hitamikuma-h.oita-ed.jp/

大分県立
日田三隈高校

総合学科の改革

「総合学科」本来の理念に立ち戻り、全指導を通して「10の力」の育成を実現

変革のステップ

実践	成果と課題	展望
<p>◎生徒に「10の力」を付けさせる「Mikuma PAS System」を構築。発表する力など社会で生きる力を育む</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎「10の力」が養われ、将来展望を持つ生徒が増加。しかし、進学実績は伸びず、定員割れを経験</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎キャリア教育と進路指導が連携できるように校務分掌を再構成。「30歳のレポート」などを通じて更なる改善を模索</p> <p>STEP 3</p>

自由度の高いカリキュラムで
多様性のある学びを保障

大分県立日田三隈高校が県下初の総合学科高校として再出発したのは、1996年度のこと。以来、総合学科の理念を大切に、教育に取り組んできた。高木啓次校長は次のように話す。

「総合学科の基本理念は、どのような状況でもたくましく生きていく人間性の形成や、個性を生かして社会に貢献する人材の育成などです。これらは総合学科の使命として不変であり、更に社会の先行きが不透明になる中で、ますます重要度が増していると感じます」

当初、同校が重視した方針は、生徒が自ら選択して学びをつくり上げられる環境の整備だった。総合学科高校の多くは、事実上コースによって選択科目が限られているが、同校は必修科目が大半を占める1年次を除き、ほとんどの科目を自由に選べる。総合学科企画推進課主任の宮脇和孝先生はその狙いを次のように話す。

「総合学科では嫌でも『教科・科目の選択』を体験します。生徒はその時点で、自分で考えること、将来を見通すことなどが求められるため、履修自体がキャリア教育となります。そして、希望する授業を履修できることが、生徒の学習意欲にもつながります」

一方で、総合学科ならではの課題に、同校はぶつかり続けていた。科目選択を生徒に委ねる

と、科目間の生徒数のばらつきが避けられず、年度によっては数人しか集まらない科目もある。更に、一つの授業に進学希望者と就職希望者が混在するため、指導が難しい。そして何よりも、楽な科目選択に流れる生徒が出てくるのが大きな課題となっていた。

「コース制を敷いて自由度を狭めることは解決策の一つです。ただ、それでは本来目指していた理念とは離れてしまうのではないかという懸念がありました」（宮脇先生）

「型にはめるのではなく、自分で道を選べ



大分県立日田三隈高校校長
高木啓次 Takagi Keiji
教職歴32年。同校に赴任して2年目。「教育は「人が大事。教師が意欲を持って働ける職場にした」と



大分県立日田三隈高校
財津恒二 Zaitou Koji
教職歴25年。同校に赴任して4年目。キャリア教育部主任。「豊かで情報の多い時代だからこそ自分で考えられる生徒を育てたい」



大分県立日田三隈高校
村山雅彦 Murayama Masahiko
教職歴22年。同校に赴任して2年目。キャリア教育部進路指導課主任。「気持ちの切り替えを大切にし、常に前向きな気持ちでいたい」



大分県立日田三隈高校
宮脇和孝 Miyawaki Kazutaka
教職歴8年。同校に赴任して5年目。キャリア教育部総合学科企画推進課主任。「現状にとどまらず、常に向上心を持って変化し続けたい」

る力を付けさせていくことこそ、総合学科が取り組むべき命題だと感じたのです」（キャリア教育部主任・財津恒二先生）

「10の力」を育成する キャリア教育

将来を見通して選択する力を付ける総合学科の理念から、キャリア教育の充実を図った。柱となるのは、2003年度に導入した「Mikuma PAS System（以下、パスシステム）」（P.26図）だ。キャリア教育の軸となる1年次の必修科目「産業社会と人間」、2、3年次の「総合的な学習の時間」の内容に一貫性を持たせ、3年間を通じてキャリア意識を育む体制を構築した。

パスシステムでは、各年次を「First Stage」「Second Stage」「Final Stage」とし、社会で生きるために必要な「10の力」を段階的に習得させていく。

1年次は、2年次以降の履修科目の決定と将来展望を抱かせるために、「調べる力」「まとめる力」「発表する力」「聞く力」の4つの力の育成を重視した。自分の希望する職業に就いている人にインタビューをする「この人に学ぶ」では、仕事内容ややりがい、その職に就くために必要な条件・資格などを、職場訪問か、遠方から電話や手紙で聞き、レポートにまとめる。対象となる職種は、警察官や介護士、税理士、フ

ライトアテンダント、レコード会社の社員など多岐にわたる。また、「この人に学ぶ」以外にもさまざまな活動を通して、4つの力の育成を図る。

2、3年次には、自分や社会への理解を深め、理想と現状のギャップを埋めるための活動を促す。活動では、4つの力を発展させた「発見する力」「分析する力」「判断する力」「計画する力」「表現する力」「行動する力」の6つの力の育成を意識する。2年次の柱となる活動は、夏休みの就業体験だ。以前は就職希望者のみだったが、3年前から2年生全員を対象とした。

「以前、進学希望者は同時期にオープンキャンパスに参加していました。しかし、『自分はどう生きたい』『こんな仕事をしたい』といったイメージを固め、その実現のために大学を選ぶのが本来の順序です。そこで、まずは社会に出た自分を明確にイメージさせるため、進学希望者にも就業体験を実施することになりました」（宮脇先生）

就業体験は、学校で最初に電話対応や言葉遣いなど最低限のマナーを学び、その後は、生徒が自分で体験したい職場を探し、電話で交渉してアポイントメントを取り、結果を教師に報告する。実施後は、レポートにまとめてグループやクラスで発表し、情報共有を図る。

「大学進学希望者は、就業体験を通して、大学で学ぶべきことや必要な資格などの情報

を得て、進学への意欲を高めて帰ってきました。また、就職希望の生徒の中にも、大学卒業者との立場の違いを目的の当りにし、進路を考え直す者が出てくるなど、双方に刺激的な活動になっています」(宮脇先生)

3年次では、「PAS Final 報告書」と「卒業論文」の完成を目指し、生徒約10人につき教師1人が担当し、ゼミ形式で調査や研究を行う。生徒が個々に決めるテーマは、医療や心理、経済、服飾、美容、スポーツなど幅広い。論理的な文章構成を重視すると共に、1人3回はグル

ープや学年の前でプレゼンテーションを経験し、発表する力を育てる。

3年間を通じて「4つの力」と「6つの力」、合計「10の力」を身に付ける取り組みによって、生徒はどのように成長していくのか。保育士を目指して進学したある生徒は、1年次の「この人に学ぶ」で保育士に話を聞き、2年次の就業体験では保育所を訪問。将来の目標を保育士に据えると、「今の自分に出来ることはないか」と考えるようになり、絵本を自作して保育所で読み聞かせのボランティアを始めた。3年次の



*学校資料を基に編集部で作成

総合学科の理念に忠実な教育を実践してきた同校だが、07年度に定員割れとなり、方向性の再考を迫られた。その一つは進路指導の弱さだ。同校の卒業生は、6割が進学、4割が就職する。例年、就職希望者のほぼ全員が内定を得られる半面、「進学希望の生徒の力を伸ばしきれない」という思いを抱く教師が少なくなかった。

「総合学科の柱となるキャリア教育を充実させてきましたが、一方でその希望を実現させるための進路指導は体系立っていませんでした。保護者から『もっと良い大学に行かせたい』といった進路保障を求める声が挙がり、弱点を突きつけられたのです」(財津先生)

定員割れの裏には、キャリア教育の成果が見えにくいという要因もあった。

「我々が行う教育の成果は、卒業から10年、20年経って本人が充実した生活を送っているかどうかにあります。本来はキャリア教育も

論文作成では、その過程をまとめて発表した。進路指導課主任の村山雅彦先生は、その生徒の成長を次のように振り返る。

「『選択する力』を養い、それが社会に求められる人材の育成につながるのだと、改めて生徒に教えられた思いがしました」

初めての定員割れを経験し 露呈した進路指導の弱さ

進路指導も同じベクトルであるはずですが。しかし、目の前の具体的な進路実現につなげる手立ては示せていませんでした。その結果、『総合学科は何を学ぶのか分からない』という声が多かったのです」（高木校長）

校内分掌を大幅に改編し 進路指導や地域連携を強化

課題解決に向けた突破口として、10年度、14あった校務分掌を4つにスリム化した。今後の方向性をよく表している分掌が、「キャリア教育部」と「地域協育部」だ。「キャリア教育部」は、従来の総合学科企画推進部と進路指導部を包括する分掌として生まれた。最大の狙いは、個々に展開していたキャリア教育と進路指導を連携させることだ。

「これまでのカリキュラムの中で培った生徒の力をいかに進路実現につなげるかという模索は、本校はもちろん、これからの総合学科の在り方を追求する重要な鍵になると思います。今は試行錯誤の段階ですが、キャリア教育と進路指導が両輪として互いに刺激し合う関係を構築していきます」（財津先生）

「進路指導についての蓄積が少ない中、1人で悩むことも多くありました。今後は3人の主任の協同体制となるので、課題を抱え込まず、個々の経験や情報を共有できます。そ

れぞれの分掌がばらばらに動いていたものを連動させ、『どうすれば生徒のためになるか』という視点を軸に、よりよい体制を築きたいと思います」（村山先生）

一方、「地域協育部」は、部活動などを担当する特別活動課、及びPTAとの窓口などを務める総務課が統合して誕生した。

「例年、就職する生徒の半数は地元企業に就職しています。高校でどのような力を養っているかを地域に伝えることは、総合学科である本校の大きな命題でした」（宮脇先生）

そこで、地域と協力して子どもを育てる「協育」活動を強化して、更に結び付きを深める方針を打ち立てた。現在、「地域協育部」を中心に生徒が市内の商店街にショップを開き、常設する計画を進めている。同校の教育を理解してもらう機会にすると共に、地域の商店街の活力にもつなげたい考えだ。

更に高木校長は09年度、地元中学校を訪れ、自校の教育内容を説明して回った。高木校長はその効果を早くも実感していると話す。

「10年度の生徒募集は順調で、目的意識や意欲が高い生徒が本校を志望してくれたように思っています。今後も情報を発信し続け、地域からの期待感や信頼感を高めていきます」

授業改善も進行中だ。これまで、4つの力は「産業社会と人間」、6つの力は「総合的な学習の時間」のみで育成してきたが、果たしてそれ

で十分に力を付け切れているのかという疑問が出てきた。高木校長は、10年度最初の職員会議で全教師に対し、「すべての学校活動で『10の力』を付けさせることを模索してほしい」と求めた。10年度からは、日々の授業の中でも「10の力」を付ける工夫が始まっている。

1期生のレポートを集め 15年間の教育を総括

総合学科に改編してから15年が経ち、10年度には総合学科1期生が30歳を迎える。そこで、これまでの教育を振り返り、成果と課題を探るため、「30歳のレポート」を実施する。すべての1期生に、レポートやアンケートの提出を依頼するという試みだ。レポートのテーマは自由だが、「産業社会と人間」を振り返って「職業人として生きる」「現役高校生に贈る言葉」などを例示しており、総合学科のカリキュラムやキャリア観などについて幅広い考えを募る。「30歳のレポート」は、次年度以降も継続し、総合学科の生徒への「最終課題」とする。

「短期的な成果だけでなく、生徒一人ひとりを長期的に見た上で、総合学科の教育成果を確かめたいのです。レポートを通して、良かった点、改善すべき点を洗い出して総括し、新たな一歩を踏み出す足掛かりとしていきたいと考えています」（高木校長）